

COME BACK GEESE

仙台の空に、再び。
シジュウカラガン羽数回復計画

アジアでのシジュウカラガン羽数回復計画のあゆみ

年	日本	ロシア	米国	できごと	羽数(万羽)
1794	●			仙台付近でガンを獲ると、30羽の内、7羽がシジュウカラガンだった。	12.3
1802	●			千島列島のウシシロ島とユカラム島で鳥とヒナを発見。	4
1915	●			千島列島で、日本政府が鳥を目的に千シノAの島嶼を始め、ウシシロ島などで放し飼いを始める。毛皮業者も多数参入。	5.6
1916-26			●	アリューシャン列島の190の島で、毛皮業者がギンギネを集中的に採る。	7
1922	●			千島列島行啓遊覧会で、101羽の計行啓観（1月7日）。	8
1936	●			宮城県(仙台市青葉区・多賀城市)に数羽の群れが発見。	7
1939-62			●	繁殖地のあちこちから鳥を採り、絶滅したと考えられた。	3
1963			●	アリューシャンのバルディール島で200〜300羽が再発見。	7
1964	●			日本（伊豆群）で1羽が再発見。1970年以降、毎年1羽が伊豆群へ飛来。	3018
1962	●			八木山動物公園に繁殖施設「ガン生館」開業。	7
1963	●			仙台市八木山動物公園と日本野鳥保護の会により、日本での復元計画が始まる。	7
1963	●		●	繁殖地のシジュウカラガンが米国から八木山動物公園に運ぶ。	7
1965	●			八木山動物公園でシジュウカラガンが繁殖開始。	7
1965-91	●			越冬地・中継地での放鳥と繁殖：7年間で378羽を、2羽が帰国。十分な成果は得られず。	7
1962	●	●	●	旧日本の保護フェーム合同会議（米国・カリフォルニア州）、アジアでの専業に合意。	11,12
1962	●			カムチャツカにシジュウカラガン繁殖施設が、ロシア科学アカデミーにより完成。	13
1963	●			旧口寄り鳥類学専門学会で、羽数回復事業が国際共同事業として承認される。	14
1994	●			八木山動物公園、日本野鳥保護の会、ロシア科学アカデミーが繁殖地放鳥の共同事業を開始。	15
1994-03	●			八木山動物公園から繁殖地の島をカムチャツカへ輸送（合計62羽）。	14,15
1995-00	●			千島・ユカラム島での環境調査と繁殖地放鳥を実施。のべ118羽を放鳥。	15
1997/98	●			4羽の放鳥個体が、日本で発見。	14
1999	●			米国のシジュウカラガンが30000羽を超え、	5
99/00	●			1羽の放鳥個体が日本で発見。	14
2000				0羽。仙台市公園緑地協会が事業参加。	
2002-06	●			ユカラム島で本格的な放鳥を実施（八木山動物公園、ロシア科学アカデミー）のべ201羽を放鳥。	14
2002/03	●			2羽の放鳥個体が日本で発見。	14
2003	●			千島・オンネクタン島で25羽が帰国。	13
2003/06	●			11羽の放鳥個体が日本で発見。	14,17
2003/07	●			17羽の放鳥個体が日本で発見。うち7羽は2年連続で帰国。	14,17
2007	●			八木山動物公園が野生生物保護の会「環境省自然環境政策局」発表	

参考文献

- 1 渡辺 正樹「1921年 新文堂」
- 2 新文堂編「1920年 江戸鳥類大鑑 平凡社、東京」
- 3 新文堂編「1949年 シジュウカラガンとヒメシジュウカラガン」
- 4 Snow (1917) Hires on the Huli Islands. Royal Geographical Society, London.
- 5 日本野鳥保護の会「1970年 野鳥の会 雑誌」
- 6 野鳥保護の会「1971年 野鳥の会 雑誌」
- 7 日本野鳥保護の会「1981年 野鳥の会」
- 8 野鳥保護の会「1982年 野鳥の会」
- 9 野鳥保護の会「1983年 野鳥の会」
- 10 野鳥保護の会「1984年 野鳥の会」
- 11 北沢 正樹「アザラシ」 大塚 幸子 監訳（1991）
- 12 日本野鳥保護の会「1994年 野鳥の会」
- 13 野鳥保護の会「1995年 野鳥の会」
- 14 野鳥保護の会「1996年 野鳥の会」
- 15 野鳥保護の会「1997年 野鳥の会」
- 16 野鳥保護の会「1998年 野鳥の会」
- 17 野鳥保護の会「1999年 野鳥の会」
- 18 野鳥保護の会「2000年 野鳥の会」
- 19 野鳥保護の会「2001年 野鳥の会」
- 20 野鳥保護の会「2002年 野鳥の会」
- 21 野鳥保護の会「2003年 野鳥の会」
- 22 野鳥保護の会「2004年 野鳥の会」
- 23 野鳥保護の会「2005年 野鳥の会」
- 24 野鳥保護の会「2006年 野鳥の会」
- 25 野鳥保護の会「2007年 野鳥の会」

日本へ運ってきたシジュウカラガンの繁殖個体数



企画・編集／仙台市八木山動物公園 960-0801 宮城県仙台市太白区八木山本町1-48 TEL: 022-229-0011 FAX: 022-229-2328
 日本野鳥保護の会 360-0502 宮城県仙台市青葉区大森町10 TEL: 6PAX: 022-82-2004
 発行／宮城県仙台市公園緑地協会
 写真協力／宮城県庁、宮内庁環境・負命正庁、宮城県公園管理、仙台市庁
 ©2007 宮内庁



江戸時代、終日雁をすると
十羽のうち七・八羽はシジュウカラガンだった。

いぬ雁



寛文鳥譜のシジュウカラガン(京都府立総合資料館蔵)

観文高語にみるシジュウカラガン

いぬ雁(シジュウカラガン)は、全12巻に及ぶ江戸時代最大の鳥類図鑑です。著者の観文高語(1755-1832)は、俳句伊達家の出身で、徳川幕府の要職(若年寄)を42年間勤めた才能な行政官で、鳥類学者でもありました。「観文高語」は、様々な博物学文章でまとめた「観文」と、個々の鳥を一通りずつ詳細に語る、その関連情報を別の片紙に書いた「高語」の二冊構成になっています。438種の鳥類について記述されていますが、特にガン類については沢山の記事が見られます。その理由は、著者の正装が、若い頃からガン類が多かった仙台藩内で、養殖に親しんでいたためと思われます。シジュウカラガンについては、その回数とともに、「自分の経験も含めて興味深い記事を残しています。特に小鳥のシジュウカラのような白い文様があることを、シジュウカラガンと呼ばれる理由としてあげ、仙台では、「イヌガン」と呼ばれ、正装が仙台にいた頃は、「シジュウカラガンが長が多く、終日雁をすると十のうち七、八はこの鳥を獲た。」と書かれています。このことから、18世紀の終わり頃には、仙台藩内にはこの鳥が多数飼養していたことがわかります。

※左端の鳥がオオカガンの幼鳥(雛鳥)

シジュウカラガンとカナダガン

シジュウカラガンとカナダガンの違い

カナダガン(Breast Canada)と呼ばれるこの鳥は、北米北部で広く繁殖し、黒い翼と、白い腹を持つガンの一種です。地域ごとに大きさ、体色などが違う。オフのグループ(亞種)に分かれます。シジュウカラガンはHyoecarpinaeに属する1つで、かつては千鳥とアリュウシヤンの属々に分類し、日本と米国西海岸で越冬していました。カナダガンの中では2番目に小さく、その体長は最大のオオカナダガンとほぼ同じ、約1/3しかありません。両種とも首の付け根の白線が特徴で、「キョウキョウキョウ」と子犬のような早鳴きで鳴きます。



シジュウカラガン(1) チュウカナダガン(5) オオカナダガン(6)

仙台とシジュウカラガン

仙台市から北へ約18km離れた風川郡大町町の高地産三郎(1896年生)さんは、雁計の名手だった父・虎蔵さんと共に1910年～1935年頃に、宮城郡福町(現仙台市宮城野区福町)の田子水田で雁計をされていました。そのことを知った藤田高樹・前日本雁を保護する会会長が、虎三郎さんに会い、当時の話を聞き取った。

虎三郎さんは、1)シジュウカラガンの越冬地は、福町町と多賀城の水田に限られていた。2)ここにはマガンもいたが、シジュウカラガンの数が多かった。3)シジュウカラガンは、20-30羽から100-200羽の群れを作り、父・虎蔵さんは、1日に最高17羽も村ち獲したことがある。4)頬が白く、手杖で「頬がぶり」した農夫に似ているので、「ホッカブリ」とか「ホッカ」と呼んでいた。当時の話をしてくれました。



絶滅の危機にさらされたシジュウカラガン

この鳥は、かつては千鳥とアリュウシヤンの属々に多数繁殖し、日本と米国西海岸で越冬していました。当時の日本での状況は、観文高語や高樹さんの証言に示されています。日本に越冬するシジュウカラガンの繁殖地だった千鳥野島では、1892年に、スノー製氷がウシシ島とエカルマ島で、シジュウカラガンの群やヒナを発見しています(1897、20世紀の初めに、シジュウカラガンに信條が記されました。世界的な毛皮ブームが起き、毛皮目的でアリュウシヤンや千鳥の属々に多数のキツネが放されました。そのためにシジュウカラガンは千鳥の属に同化し、絶滅したとされていました。



千鳥野島とエカルマ島の位置

シジュウカラガン羽数回復計画

1963年、奇跡が起きました。地滅したと思われていたシジュウカラガンの小群が、アリュウシヤンのバルディール島で発見されたのです。米国政府はシジュウカラガン回復チームを作り、30年を越える努力の結果、1998年には米国の群れは、30,000羽を超え、絶滅の危機を脱しました。日本では1980年代(1980年代)や、仙台周辺(1985年頃)に、百羽単位で飛来していましたが(1980年、1985年、1988年)。その後日本への飛来は途絶えたと思われていました。1960年代に、宮城県・伊豆沼でシジュウカラガンが再発見されましたが、その数は1～数羽に減っていました。



仙台市八木山動物公園のシジュウカラガン繁殖施設

仙台市八木山動物公園で生まれた子と親鳥

1983年に、アジアでの羽数回復計画が、仙台市八木山動物公園と日本雁を保護する会により、実行に移されました。米国から八木山動物公園に送られた親鳥の飼育繁殖で、千鳥から日本へ送る群れの回復をめぐり日米の共同事業も進まりました。1993年に、カムチャツカにもロシア科学アカデミーの繁殖施設が完成し、親鳥が米国と八木山動物公園から運ばれました。1995年には、かつての繁殖地の千鳥・エカルマ島での放鳥が始まり、のべ426羽のシジュウカラガンが放されました(2006年現在、しばらくは成果が上がっていませんが、11年後の2005/06年度の冬には、11羽のシジュウカラガンが国内で発見され、さらに翌年の冬には、17羽の飛来が確認されました(調査班グラフ参照)。しかも、その内の7羽は卵の採取を待って、3年後に飛来した鳥で、回復計画が大きく前進したことを確信させる出来事でした。



飛来したシジュウカラガン(風川町で撮影)

千鳥・エカルマ島で放鳥され、国内で発見されたシジュウカラガン(1987～2006年)の回復計画(2006年度)



羽数が回復した米国のシジュウカラガン(カリフォルニア州)

今後の課題

- 放鳥したシジュウカラガンの自然繁殖：羽数を自力で回復するために不可欠です。
- シジュウカラガンの数を、最低1,000羽まで増やす：群れを自力で維持するには、最低1,000羽が必要です。
- 残された生息地の保全と、失われた生息地の復元：歴史的越冬地・仙台早期に、再びシジュウカラガンを呼び戻す取り組みも必要です。



ロシア科学アカデミーの繁殖施設



エカルマ島

カムチャツカ州・エリツボ市にある繁殖施設から、若いシジュウカラガンの、エカルマ島に運ばれた放鳥された。



注) シジュウカラガンという名称はBreast CanadaとHyoecarpinaeの両方に用いられ、鳥類学図鑑の慣習によることとなります。ここでは地名をBreast Canadaとカナダガン、放鳥が期待される繁殖地をHyoecarpinaeとシジュウカラガンと呼んでいます。鳥類学図鑑から持ち込まれ、国内で繁殖を始めた「鳥類」の大型カナダガン「シジュウカラガン」と呼ばれることがありますが、言葉から推してこの鳥はまったく別の種類(種類)です。

仙台の空で、またあう日まで。